

ガンダーラ仏教遺跡・ラニガト寺院址の調査と保存

正会員 西 川 幸 治 君
正会員 濱 崎 一 志 君
正会員 増 井 正 哉 君
小 谷 仲 男 殿
難 波 洋 三 殿
古 賀 秀 策 殿

ラニガト寺院址は、東西文化の交流の中で独特の仏教文化を生み出したパキスタン北西辺境のガンダーラ地域に位置し、南北 1.1km、東西 0.7km の範囲に分布している。候補者 6 名を中心とする京都大学学術調査隊は、この土地で 1960 年代に始まる京都大学による調査の伝統を受け継ぎ、1983 年以降、調査研究と保存修復に精力的に取り組み、調査研究で多くの学術的成果を上げるとともに、保存修復を推進して地域貢献に寄与し、国際的な成果を上げてきた。本業績の特徴は以下のとおりである。

(1) 1983 年の調査開始から 2012 年の完了報告に至る足掛け 30 年にわたる活動を継続的かつ精力的に行った。1983 年から 1989 年までの間、遺跡の中核部で大規模な発掘調査を 3 回、中間調査を 2 回、発掘調査後は 1992 年までに補足調査を 3 回実施している。1993 年以降はユネスコの支援のもとにパキスタンと共同で遺跡の保存修復を進め、アフガン情勢の悪化に伴う事業中断があったものの 2008 年に保存整備事業を完了させている。さらに 2011 年には保存修復事業の成果を含めた記念的な調査報告書改訂版を刊行し、2012 年にパキスタンで開催された報告会で高い評価を得た。

(2) 大規模な発掘調査を実施し、顕著な学術的成果を得ることができた。学術調査の主な成果には、遺跡の東地区において塔院形成以前の形態から塔院の形成・主塔の増広への伽藍変容を明らかにしたこと、遺跡の西南地区において仏像が仏塔と同格の地位を得て塔と仏像を納める祠堂が並立する状況を明らかにしたこと、塔の基壇形態と石積み技法の分類と編年を行ってラニガト遺跡全体の年代特定を可能にしたこと、遺跡の東地区、西地区、西南地区、南地区の相互関係と各地域の展開過程を明らかにして建築史的な位置付けを行ったことなどがある。

(3) 発掘後の保存修復事業を継続的に進め、国際貢献に寄与した。保存修復事業を通じて得られた成果には、遺跡の分布状況とその保存・管理状態の調査に基づき遺跡のインベントリーとその管理のあり方を提案してガンダーラほぼ全域の台帳完成に貢献したこと、保存修復のモデル的施工を先導することにより遺跡の保存活用及び遺跡管理のあり方を提案し保存整備への道筋をつけたこと、パキスタン現地での技術訓練指導及び日本への専門家招聘により多くの人材を育てたこと、修復整備によってラニガト遺跡が世界文化遺産暫定リストに記載されるまでになったことなどがある。

以上のように、ガンダーラにおける仏教文化の変容を建築学的観点から明らかにし、その後も保存修復に誠意をもって取り組んだ業績は高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。